

吉備媛王墓猿石の模型製作

飛鳥資料館

飛鳥資料館では屋外展示物として、飛鳥に関連ある石造物の模型の製作を進めている。その最初として、明日香村下平田の吉備媛王墓敷地内にある4体の猿石の模型を製作した。この製作にあたっては、宮内庁書陵部、同畝傍監区事務所及び、地元下平田の好意と配慮をうけたことに感謝したい(口絵8)。

猿石の位置は、これまで度々移動していることが知られている。元祿15年下平田池田の田圃下より出土した、猿・法師・男・女と呼ばれる奇怪な石造物は、『今昔物語』に記載されているように、復原的に欽明陵古墳(梅山塚)前方部南側の濠際に立てられたらしい(幸田幸男氏蔵、梅山塚図 第1図)。その後、吉備媛王墓(金鳥塚)の現在地に移されたものである。

吉備媛王墓の林間から垣間見える奇怪な姿は、いずれも、表情豊かで、両手を腹や胸で合せている。手指は4体とも5本揃い、下半身には陽物を表現した♂である。猿・男・女の3体は二面石で、背面には表面と違った全身の浮彫を施している。とくに両耳のうしろには毛髪を示す羽状の線がみられる。手指は3・4本と表面より少い。うち2体はうずくまった姿をしている。背面像は獣形をしていて、全体の相貌から推して♀であろう。高取城入口道端に運ばれた猿石も背面欠損部に毛髪の一部が残存しており、この3体と一連のものである。法師は背の肋骨を表現した筋肉質の単身像で、最も人間らしく、他の3像とは手法にも違いがある。

模型は乳白色のシリコン系樹脂を何度も塗り、布で厚みを持たせながら固定させ、范抜きを行った。鑄込みは、無色のエポキシ系樹脂と花崗石を混合して、表皮となし、内側はロービングクロスとガラスクロスを芯に埋込み、裏打の補強をした。模型をつくるに際しては、奇怪な形状だけではなく、石質の差異について、気を配った。そのため、実物の詳細な調書を作成

第2図 猿石の模型

し、各部分ごとのサンプルをつくって、照合をくりかえした。4体の猿石は、すべて飛鳥地域特有の花崗石で作られ、黒色砂岩の斑点、縞状の質感や、石材の色調が単一ではなく、微妙な違いがある。この質感に合わせるため、実物の石質に最も近い明日香村細川谷に分布する花崗岩と黒色砂岩を粒状に砕き、樹脂を接着剤として埋込んだ。鑄込みについては、表面に花崗岩が露出するよう、樹脂を拭きとったため、従来のエポキシ系樹脂の着色のみによる仕上げより、質感を一段と近づけることができた。また、退色を防ぐ利点ともなった。実物には、永年にもわたる苔が付着しているが、模型にも新たな苔が生えるため、再現しなかった。

今回の模型は花崗岩を多量に使用したため重量が増し、最大の猿石は約100kgになった。そのため、屋外への設置は、安全性を考慮して、内部に鉄骨を組込み、コンクリートで固定した。なお、1976年度から一般に公開している。

(猪熊兼勝・星山晋也)